Festival Echo '18

フェス・エコ

特集 今年も
フジロックやってます。

湯沢苗場とともに20年！

Interview

サカナクション／TOSHI-LOW
D.A.N.／水原希子／MADBUNNY

再び世界一クリーンなフェスにするために

キャンプインフェスを
快適に楽しむ目からウロコの方法！

Take Free!
2018 Summer

Celebrating 20 Years in Yuzawa Naeba

20 Years Later

暴風雨の富士、灼熱の豊洲を経て、新たな場所でどんな体験をさせてくれるのかと期待して向かった苗場。そこには「夢のような」時間が待っていた。自然のなかで音楽を受け入れ、そこにいるすべての人と時間も共有していく。野外フェスというカルチャーが理想とするものがそこにあった。それから20回目の夏がやってくる。今年も苗場に夢の時間が現れる。

当時のフィールドオブヘブンには
本格的なヒッピーファションの方が
多く出没

出演アーティスト数
約100組
約250組

まだボードウォークがなかったフジロックの森。
ボードウォークは2003年に設置され、
ステージ間の移動が快適な森林浴の時間に

20 Years Later

20 Years Later

三日連続でヘブンのヘッドライナーをつとめた
PHISHは、毎日4時間にもおよぶ
伝説的なライブを行った

3日間通しチケット
39,000円
39,800円

20 Years Later

20 Years Later

20年前からほぼ形を変えていない
ホワイトステージ。
山の木々はだいぶ成長した

ステージ数
5
15

当時はゲレンデがキャンプ
サイトだったため斜めだった

'99年は人もまばらでステージもなかったジプシーアバロン。
いまでは大人気のステージに

フジロックのスタッフ数
2188人
3793人

子どもを連れたファミリーの来場者も増え、
大人から子どもまで楽しめるフジロックに

20 Years Later

約7.2万人
来場者数
約12.5万人

現在レッドマーキーがあるエリアには
その前身となるヴァージンテントが立てられ、
主にDJがラインナップされていた

1999 photo by Kazunobu Kataoka

現状を嘆くより行動を。小さな一歩が大きな流れにつながる。

スポークスマンとして、あるいはフジロックを象徴する存在のひとりとして、毎年のようにフジロックに出没しているTOSHI-LOW。BRAHMANとしては5年ぶりのフジロック登場となる。どんなメッセージをステージから発してくれるのだろうか。

Text by Takashi Kikuchi　Photo by 横山マサト

BRAHMAN TOSHI-LOW

―― BRAHMANとして初参加したのが99年。フジロックの変化をどう感じていますか。

もちろん感じていますよ。20年前は装備も含めてみんなが初心者だった。みんなが手探りのところからはじまって。数年して快適にフジロックを過ごしたり、フジロック通になっていったりして、フジロックを楽しみだしたりしたが故に、今度はフジロックという存在を自分のものだというふうに思い過ぎる人たちが出てきたことによって、その人たちが「フジロックはこうあるべきだ」という勝手な妄想を膨らませていった。そしてフジロック以外の世代であったり、例えばフジロックと毛色の違ったバンドが出た際に文句を言うみたいな流れが生まれたときに、ああやっぱり変わっていくんだなって思って。いわゆる老害みたいな（笑）、こだわりとか信念とはまた別の、自分たちのものだっていう所有感と排除感。俺はそれがまったく好きじゃないんですよ。

―― その感覚って好きが強くなり過ぎるとどうしても出てきますよね。

出てくるし俺たちにも向けられる。「お前らを見に来たんじゃねえよ」というような感情をわざと出してくる人たちはやっぱりいる。俺的にはフジロックは自分の心の拠り所のフェスだと思っているけれど、他の人から見たら「お前らはいなくていいよ」って思われていることもわかっているし。でもその厳しさも俺はフェスではありだと思っているから燃えるけど（笑）。

―― 20年という時間には社会全体の変化もあります。この20年で右傾化しているというか、戦争が身近なものになっている。パワハラやセクハラという言葉も社会のなかで当然のように使われているし。

どこも小っちゃい社会ですからね。苗場に1日4万人とか5万人とかが集って、小さな社会を作るわけでしょ。そのことがどこかしら社会の縮図であって。もちろんロック好きの開放的な心の持ち主ばかりが4万人集まることが理想だとは思うけど、やっぱり100人にひとりはバカだし、もっと増えていけばずるいことをする奴がいるし、犯罪する奴もいる。社会的な考え方が右傾か左傾にかかわらず、偏っていくことの割合がそのまま反映してくるものだと思う。

―― 社会という視点で考えれば、いろんな人がいなければおもしろくないですから。多様性があることによって個性も引き立つわけですし。

そうなんですよね。いろんな人がいて、いろんな人が自分の意見を言ってもいいっていうことが、実は本当はおもしろい。だけどそれを言う最低限のルールは、他の人たちを排除しない、差別しないっていうことだと思うんです。共存するスペースをお互い明け渡す。

―― 具体的に20年で変わったところってどこに感じていますか？去年はゴミがすごく多くなっていました。

若い世代の方が、ちゃんとしていますよね。なぜなら、自分が能動的に行こうと思ったときにはすでにフェスがあったし、俺たちが子どもの頃より若い世代が子どもだった頃の方が街はきれいだったと思う。俺たちの時代ってもっと猥雑さもあって、すごかったじゃないですか。生活排水も汚かったし、川には泡みたいなものがポンポン浮かんでいて泳ぐなんてことはできなかったし、臭いし。子どもの頃の街の裏側って汚いイメージがあって。今の時代の方がキチンとしている子の割合的には多いんじゃないかな。じゃあ誰が捨てているかっていうことですよね。

―― 去年は雨がずっと降っていたということも汚かったひとつだろうし、海外から来た人が多かったこともひとつの要因としてあるのかもしれません。

ゴミが落ちているときに、じゃあどうすればいいのかって思うんですね。フジロックが汚くなったと嘆くのは簡単ですけど、じゃあ誰かのゴミをあなたはひとつでも拾いましたかっていう意識が足りないんだと思います。フジロックが汚くなったっていうことで終わるんじゃなくて、目の前にゴミが落ちていて、ゴミステーションがそこにあるんだったら、誰のゴミかわからないけど、持っていっちゃえっていう気持ちの余裕が、去年のフジロックに関しては少なかったんじゃないですかって思う。その原因が降り続いた雨だったのかもしれないし、もちろんやり散らかした人が多かったのかもしれないけど。俺は個人が大事だし、ロックでひとつになろうなんて思ってもいないし、みんなで手をつなごうなんてヘドが出る。だけどああいう場に自分がいたとしたら、しゃあねえけど誰かがこうしてしまったら持ってちゃおうと。例えば誰かが倒れていたとしたら見て見ぬふりはできない。フジロックを共有するというイメージの低下があるんじゃないですかね。俺たちがフジロッカーなんだよって威張っていたおじさん、おばさんがいたとしたら、それをやるべきだと思うんですね。私たちのフジロックをきれいにしようって。率先してそれをやる。そしたらそれを見ている人たちは「あ、そうか」と思うはず。意識の低下を嘆くより、ひとつでいいから自分で行動してみる。その背中は誰かがちゃんと見ている。それは若い子かもしれないしマナーの違う外国人かもしれないけど、何人かは真似をすると思うんです。少なくとも、それをやっている人の前ではゴミをポイと捨てられない。

―― ひとりずつが好きにつなげる行動をそこで表現することが必要。

それが低下してしまっているんじゃないですか。

―― 他者の視線を意識し過ぎているのかもしれませんね。その総体として社会のコミュニケーションとして健全じゃないような気がします。

それが今の社会だとしたらそれも認めつつ、そうじゃない社会を楽しむために、こういうフェスのような非日常の中で自分たちが楽しむために、じゃあどうすればいいのかっていうことを考えれば逆の方向が見えてくる。そっちじゃないんだよ、こっちなんだよって見えてくる。人がぶつかってきそうになったら、ちょっと横にずれるっていう感覚でいいわけじゃん。

―― 知らない人だと許せなくなってしまうとか攻撃してしまう人間の性ってどこから生まれてくるんでしょうね。

それも人間。だけど今年のフジロックでは、ほんのちょっとだけ人にも優しくしてみるとか。そして、文句を言う前に自分で行動する。大きなことを変えるには、小さな一歩からだと思う。その小さな一歩の流れに自分がなってみる。それをやってからの文句なら聞きますよ。

TOSHI-LOW（BRAHMAN）

1995年にBRAHMANを結成。1999年にメジャーデビューを果たし、苗場1年目のホワイトステージでフジロック初出演を果たす。東日本大震災以降、継続的に復興支援活動を行うために非営利活動団体として幡ヶ谷再生大学復興再生部を発足させた。6人編成のアコースティックユニットOVERGROUND ACOUSTIC UNDERGROUNDとしても何度もフジロックに登場している。BRAHMANとしては2013年以来6年ぶりの苗場降臨。

http://brahman-tc.com/

CD 『梵唄 -bonbai-』

5年ぶりとなるフルアルバム。平易な言葉で深い心情や豊かな情景を描き出す楽曲が生まれる一方、怒りを綴ったハードコアナンバーも吐き出した。4人が創る音楽はより豊かに、より深くなった。そしてより多くの心に届くようになった。

富士祭電子瓦版

マジョリティのなかのマイノリティ。オーバーとアンダーの架け橋。

2012年以来のフジロック登場となるサカナクション。メジャーシーンのなかで、アンダーグラウンド的なパーティー感覚もライブのなかに混入させている稀有なバンドだ。フジロックで「特別」な時間を演出するに違いない。

Text by Takashi Kikuchi　Photo by 横山マサト

サカナクション 山口一郎

——最初にフジロックへの出演を意識なさったのいつ頃だったのですか。

僕は北海道の札幌で育ち、音楽を札幌ではじめたんです。デビューが20代後半とそれほど早いわけじゃなかったんですね。本格的に活動していくために東京に出てきて、ライブを充実させていくにあたって僕らのPAチームを形成したんです。そのPAチームはアコースティックっていう会社なんですけど、そこがフジロックの音響にも携わっていて。そのチームは富士山麓で1996年に開催されたレインボー2000というテクノパーティーを立ち上げからずっとやっていた人たちで、レイブパーティーやフェスの成り立ちみたいなものだったりとか、日本における音楽カルチャーの成り立ちをいっぱい教えてくれたんです。そこでフジロックの立ち位置というものが、日本の音楽シーンにものすごく影響を与えたっていうことを知ったんです。ブッキングも今のように日本のメジャーどころがポツポツと入るものではなくて、日本のミュージシャンにとってはものすごく大きな壁があったということも聞いて。

——メジャーの日本人ミュージシャンは、確かに多くなかったイメージがありますね。

お客さんのリテラシーもそうですし、求めていくものもすごく高いフェスなんだっていうことが自分のなかにあって。メジャーシーンに自分たちはいるけれど、いつかその立ち位置のままフジロックというステージに立ちたいっていう思いを、メンバー全員が共通して持っていましたね。そして2012年にホワイトステージに立たせてもらった。僕らの出演が発表されたときに実はディスられたんですよ。「なんでサカナクションを出すの?」って。

——日本のメジャーのバンドを入れることに対して、ある種の拒否感が出てしまっていた時代だったのかもしれないですね。

僕らの前がカリブーで、後ろがジャスティス。今、振り返ればものすごい流れですよね。踊ることを目的としたお客さんがパーっといて。僕らはフジロック用にセットリストを作って、シームレスに曲をつないで、他のフェスでやるようなセットリストではなくて、フジロック仕様にアップデートしてライブをしたんです。そしたら思いのほか反応が良くて、入場規制にもなった。フェスの後にも「サカナクションをなめていた」みたいな反応が多かった。フジロックのライブによって、ちょっと自信を持つことができたんです。アンダーグラウンドだったりマイノリティな音楽が好き、メジャーなものを受け入れたくない人たちにも、ちゃんとライブに向き合っていれば、オーバーグラウンドでやりながらも自分たちの音楽が伝えられる。マジョリティーとマイノリティの通訳みたいな存在のバンドでいられたらいいなっていうことを、そのときに強く思ったんですね。サカナクションのファンも、フジロックにはじめて行くっていう人も多くて、それまでは環境も整っていて浴びる音楽しか味わったことのなかった子たちが、僕らがフジロックに出たことで洋楽に触れて、野外で新しい体験をして、僕らから巣立っていくというか。なんかそういう役割でいるっていうこともすごく気持ちいいなあって思ったんです。

——オーバーグラウンドとアンダーグランドをつなぐ存在なのが、サカナクションの立ち位置のように感じていました。

80年代って、僕は80年生まれでリアルタイムではないんですけど、調べていくと音楽とファッションって密接につながっていた。セックス・ピストルズが好きな人は、セックス・ピストルズを好きだっていうことがわかるスタイルをしていたんです。

——確かに安全ピンを付けたり。

家に行ったら、どんな音楽が好きかっていうのが一目瞭然で。

——パンク以前ではモッズもあったし。

90年代まではそれがギリギリ残っていて、突然2000年代からファッションから音楽が想像できなくなった。音楽と他のカルチャーが結びつかない時代になってしまったんですね。日本でもロックフェスが増えてきて、日本の若者たちの音楽の楽しみ方が、インターネットというものの存在で変わってきた。僕らの時代は音楽を探す遊びで、美しくて難しいものを理解することがひとつの快感だったんだけれど、そうじゃなくなった時代になったと思っていて。日本だけではないんでしょうけど、音楽の立ち位置そのものが変化したのかもしれないですね。僕らはふたつの音楽の時代をまたいできたバンドなので、つなぐ役割があるんじゃないかなって気がしているんです。フジロックはまさにその象徴というか、フジロックで通用しなかったら、フジロックで認めてもらえなかったら、いくらメジャーシーンで続けていても、テレビの音楽番組に出ていても、バンドとしては意味がないなと思える。フジロックはそんな存在なんですね。

——サカナクションとしてのバンドのスタンスがその言葉から見えてきます。

環境が整っている都市型のフェスに出ている日本のメジャーのミュージシャンにとって、フジロックに出ることは怖いことだと思う。逆にそういうフェスに対してアプローチしていないバンドにとっては、フジロックのステージが楽しみであり違う怖さがあるんだと思う。

——6年ぶりとなる今年のフジロックはどんなライブをしたいと思っていますか。

ずいぶん空いてしまったんですね。僕らのことを目的に見に来てくれた人たち、僕らのことをあまり聞いたことがないけれど見に来てくれた人たちにいい違和感を感じてもらう。いい意味で期待を裏切るようなことはやりたいと思っています。今の日本の流行りのJ-ROCK的な縦ノリみたいな要素も、フジロックのお客さんに体験してもらいたいなとも思っています。それをどう見せるのかっていうことを軸にしながら、全体のストーリーを考えていきます。タイコクラブなどでは気負って前半に一曲20分とかでやったことがあったんですね。けれど予想していたよりもその20分ではみんな踊らなくて、シングル曲をやったら盛り上がるみたいなこともあったんですよ。知っている曲を聞きたい、楽しみたいという本能みたいなものはあるんだろうなと思うから、その期待も応えつつ、日本人独特の無理やり跳ねているグルーブというか、ナチュラルじゃない跳ねみたいなグルーブを、BPM126くらいで構築することもやってみたいなって思っています。

山口一郎（サカナクション）

2005年に活動を開始。日本の文学性を巧みに内包させる歌詞やフォーキーなメロディ、ロックバンドフォーマットからクラブミュージックアプローチまでこなす変容性。さまざまな表現方法を持つ5人組のバンド。「ミュージシャンの在り方」そのものを先進的にとらえるその姿勢は常に注目を集め、各界のクリエイターとコラボレーションを行いながら、音楽と他ジャンルが混ざり合うイベント「NF」を2015年スタートさせた。

http://sakanaction.jp/

CD 『魚図鑑』

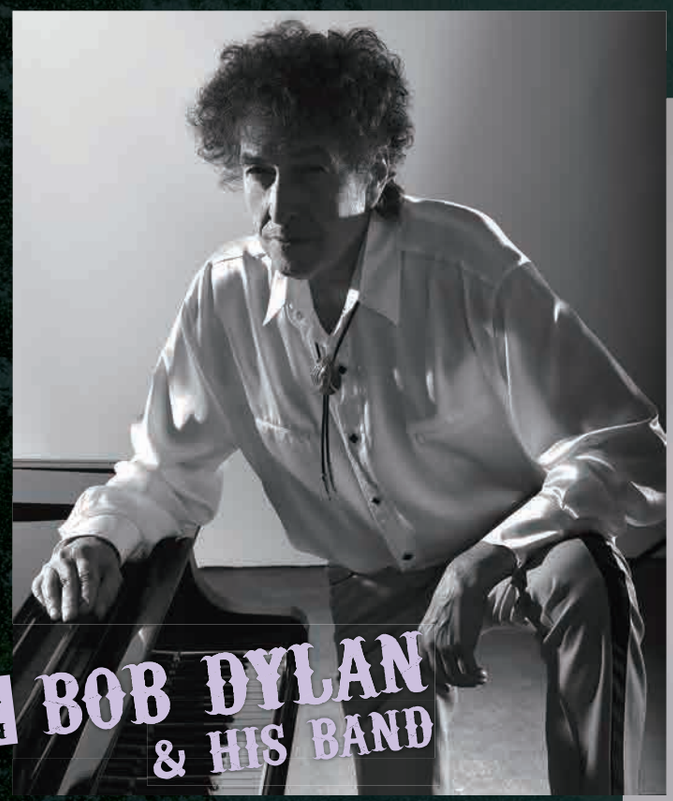
今年3月にリリースされた10周年の活動を総括するバンド初のベストアルバム。2CDに34曲が収録され、DVDをパッケージした初回限定盤も発売されている。サカナクションの多様性が聞こえてくる。「僕たち、私たちが選ぶ!サカナクションのベスト1曲」もホームページで展開されている。新作のフルアルバムはこの秋にリリースされるとか。

※ インタビューの全文は「富士祭電子瓦版」（http://frf-en.jp/）にて掲載中!

全世界から注目を集める3日間。進化する音楽シーンの「今」。

伝統と革新。音楽（ライヴ）は振り子のようにその両極端を常に行ったり来たりしながら、今という時代を失踪している。今年のフジロックは、まさに今という時代を象徴するヘッドライナーになった。

Text by Hideki Hayasaka



2018 HEADLINERS

2017年に「旬で雑多」と表現したフジロックのラインナップが、苗場開催20年目の節目となる2018年は「旬」の文字がどデカくなって帰って来た。

ビジネス的な話を冒頭で語るのははばかられるが、今回は声を大にして言いたい。7月から8月にかけて全世界でプロモーターがメインアクトを巡って壮絶な獲得競争を繰り広げているなかで、今年のフジロックのN.E.R.D、ケンドリック・ラマー、ボブ・ディランという3日間のヘッドライナーは壮観の一言、間違いなく2018年のベスト・フェスのひとつになるだろう。

初日27日のトリを務めるファレル・ウィリアムス、チャド・ヒューゴ、シェイ・ヘイリーの2人によるスーパーユニット、N.E.R.D。近年ではスーパープロデューサーとしてのファレル・ウィリアムスの活躍はこの紙面では列挙できないほどだけれど、N.E.R.Dとして昨年末に7年ぶりのアルバム『ノーワン・エヴァー・リアリー・ダイズ』をリリースし、アメリカやヨーロッパの各地で開催される、2018の音楽フェスの目玉といえる存在となった。贅沢を言えばケンドリック・ラマーをフィーチャーした「ドント・ドント・ドゥ・イット!」の再演を期待している。もし実現すれば一生ものの思い出になりそうだ。

28日はケンドリック・ラマーが登場する。先日アルバム『ダム』がピューリッツァー賞音楽部門を受賞。クラシックとジャズ以外で選出される初の快挙も伝えられたばかり。グラミー賞で最優秀ラップ楽曲賞を受賞した「オールライト」が「ブラック・ライヴズ・マター運動」（黒人の命も大切だ）で合唱されるなど、黒人への白人警官の暴力や殺害を受けての抗議が世界レベルのムーブメントへの後押しになっている。音楽界のみならず彼の影響力を伝えるニュースやテキストを通して、その活動や詞に込められたメッセージを受け取りながら、それを取り巻く社会問題に向き合いライヴに臨むのもひとつの考え方だろう。一方で超一流のパフォーマンスを体験することで得られることも少なくない。現在、世界で最も重要なヒップホップ・アーティストがケンドリック・ラマーだ。

同じようなニュアンスで紹介したいのが、29日の大トリであるボブ・ディランのフジロック出演という快挙だ。特に彼の音楽に詳しくない、知識がないので構えてしまうと感じているいる人は、何よりもフジロック開催時に77歳になっているディランが、今なお最高のライヴパフォーマーであることを体感して欲しい。数十年聴き続け、ディランのライヴに通ったところで、有名曲もまったく違うアレンジで演奏するし、常に正解がないのが彼の音楽。「日本のフェス初出演」「ノーベル文学賞受賞後初の日本公演」「101回目の日本ライヴ」などちまたではズッシリと重い言葉が並んでいる。そばから見ても「一見さんお断り」的な敷居の高いイメージのある「ディラン体験」が、苗場の自然の風通しの良い空間で世代を超えた幅広い人たちの体験になる何よりの機会だと感じている。

3日間にヘッドライナーの最強ぶりばかりを強調してしまったが、今年はさらに世界の音楽シーンのトレンドに沿ったよりジャンルレスなメンツが勢揃いしている。

音楽のジャンルって何？ 多様性こそフジロックの真価。

世界の音楽を自然のなかで楽しむこと。日本の自然の多様性と共生しながら、さまざまな人とさまざまな音楽カルチャーを浴びる。これこそがフジロックでしか持ち得ない体験だ。今年も世界の多様性が苗場に集う。

Text by Hideki Hayasaka

「ジャンルを越えた多様性」はここ10数年の音楽フェスのラインナップを語るうえで合い言葉のように使われてきたが、今年のフジロックの多彩さは、もはやロック、ポップ、R&Bといったカテゴライズが意味をなさないジャンルが決壊した新時代を例年以上に実感する。

そんな昨今の状況を象徴するひとりが27日に登場するポスト・マローンだ。サウンドはヒップホップ・アーティストという体裁ながら、ロック・レジェンドに己をなぞらえたナンバー「Rockstar」の衝撃と、影響はラップだけでなくメタリカ好きのメタル野郎という側面も抱えている。彼のカリスマ性溢れる仕草やライブバンド的なパフォーマンスがバカ受けしている旬な男。本国と日本のギャップを埋めるオーディエンスの役割も責任重大だろう。

続いてチューン・ヤーズ。今年1月に素晴らしい新作を発表している。ライブでは4ピースのバンド形態でエフェクターを駆使した変幻自在なボーカルを聴かせる。アルバムとはまた違った世界観を楽しみたい。

28日のMGMTは5年ぶりの新作『Little Dark Age』を引っさげての出演となる。一気にポップな作風に舵を切り80年的とも評されている新作の再現性は如何に？

新たな才能では英豪日韓、多国籍のメンバーによるスーパーオーガニズム。日本人シンガー、オロノを擁し日本でも知名度がアップし日本公演も成功を収めた。ローファイなど90年代的な価値の再創出と、現世らしい自由かつ奔放なクリエイティブの融合。それでいて荒々しさも持ち合わせた演奏をぜひ楽しんで欲しい。

先日アルバム『分離派の夏』を発表した小袋成彬も注目だ。裏方から宇多田ヒカルの共演～プロデュースを経て表舞台に……というストーリーを目にした方も多いと思うが、繊細なサウンド、歌詞を含めた神経の行き届いた仕事をどうライヴで展開するのか。編成も含め気になるひとりだ。

29日の注目はアンダーソン・パック＆ザ・フリー・ナショナルズ。ヒップホップ系のシンガー&プロデューサーという肩書だが、アルバムの作風とライヴパフォーマンスが一致しないパフォーマーとして多彩な顔を持つ。

美しいソングライティングとクワイア仕込みの美しい歌声で聴かせる新たな才能がサーペントウィズフィート。鼻ピアスとファッションのインパクトにも注目。

もう一組ビッグネームだが未知数過ぎるのがヴァンパイア・ウィークエンド。数週間前にLAで復活ライヴをしたばかりで、ロスタム・バトマングリ脱退後の再始動、アルバムもまもなく届けられる。アルバム名が『Mitsubishi Macchiato.』と変なタイトルなのも気になる。

ここまで紹介してきたアーティストと対象的に安心と安定のジャック・ジョンソンというチョイスも3日目の疲労ピークの身体には優しいかもしれない。

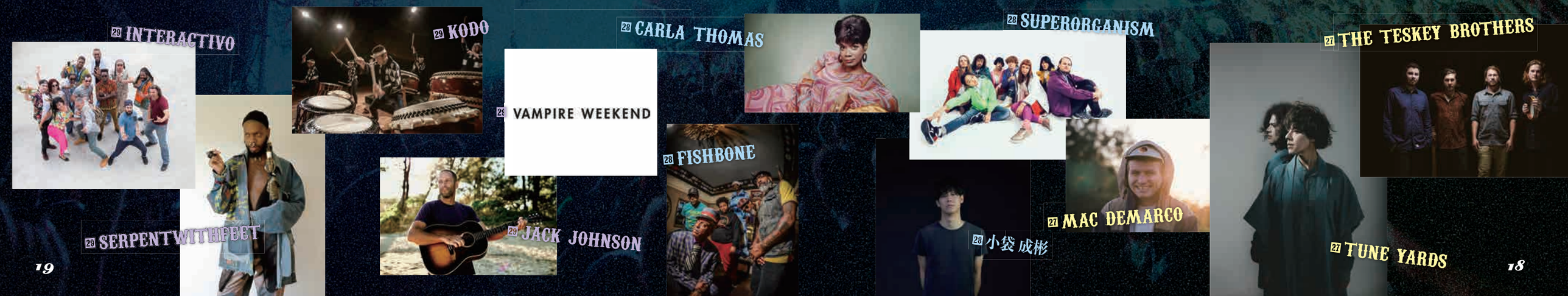
比較的エッジ立ったアクツのリコメンドをピックしたが、ルーツを新たな継承者の発掘や、レジェンド枠も今年もしっかり設けている。

27日。ナードな見た目を大きく裏切るメロウな良曲揃いのカナダ人ソングライター、マック・デマルコ。ガレージ系からファンキーで踊れるニューウェーブサウンドにキャラ変を遂げたパーケイ・コーツ。オーストラリア発のザ・テスキー・ブラザーズは20代の若者がオリジナルもビックリのサザン・ソウルを聴かせる。鬼才ギタリスト、マーク・リーボウのセラミック・ドッグもお忘れなく。

28日。もはや説明不要のミクスチャーのレジェンド、フィッシュボーン。彼らをさらにふた周り上回るメインフィス・ソウルの女王、カーラ・トーマスは伝説のハイ・リズム・セクションを率いての豪華仕様で登場。彼女たちの南部ソウルの伝統を継承する新世代ともいえるナサニエル・レイトリフ・アンド・ザ・ナイト・スウェッツとの新旧ソウル巡りもオススメ。新世代のゴリゴリ轟音ロックンロールを聴きたければ18歳のフロントマン、アロウ・デ・ワイルド擁するスタークローラーや、コロンビア出身のアフリカンなコロンビア、中南米などのごちゃ混ぜサウンドが唯一無二なランチョ・アパルテなど。

29日はより国際色豊かなラインナップ。00年代にカントリーやウエスタン・スウィングとの新たな出会いを提供したホットクラブ・オブ・カウタウンのギタリスト、ウィット・スミス率いるウェスタン・キャラヴァンと、即興演奏を主体にジャンルを越えたライブ演奏でアメリカのフェスで高い評価を得ているブルーグラスバンド、グリーンスカイ・ブルーグラス。ピアニスト、ロベルト・カルカセース率いるキューバーのスーパーユニット、インテラクティヴォ。アイリッシュ・トラッドなどのルーツ系の老舗ホットハウス・フラワーズ。日本が世界に誇る太鼓芸能集団の鼓童も注目度大だ。

3日間、オーディエンスそれぞれの千態万状のタイムテーブルをお楽しみにあれ！



20回目の苗場。UNFAIR GROUNDという地元からのプレゼント。

★今泉超利（苗場スキー場）★井口智裕（湯沢温泉旅館組合）
★高橋五輪夫（湯沢町議会議員）★新井一州（苗場観光協会）

今年のフジロックで、新しいエリアが登場する。かつてオレンジコートがあった場所に予定されているアンフェアグランドだ。アンフェアグランドはイギリスで開催されている世界最大級のフェス、グラストンベリー・フェスを象徴しているようなエリアで、グラストンベリーが今年は開催されないことから、そのカルチャーをエリアごと日本に持ってくることになった。

フジロックのアンフェアグランドに多大なサポートをしているのが、地元の湯沢と苗場。苗場20回目の節目に何かできないかと考えた地元の人たちが、去年実際にグラストンベリーに行ったことから、アンフェアグランドの日本移行が実現化していった。

20年という時間が培ってきた地元の湯沢・苗場とフジロックの関係。お互いをリスペクトし、お互いをサポートすることでその関係は構築されてきた。アンフェアグランドは湯沢や苗場からのフジロックに遊びに来る人たちに向けての、感謝の印のひとつなのだろう。フェスは地元に根付いてこそ、本当の祭りへと進化していく。

グラストンに行ったのが、フジロックとも深く関わってきた人たち。それぞれにフジロックの20年目の思いを語ってもらった。

「開催当初は地元では反対の声もあって、旅館では部屋を提供したくないという声もありました。けれど今では、期間中はフジロックのお客さんしか受け入れていないところも多い。フジロックは私からすれば車で30分で行ける海外旅行。湯沢とは別世界がそこで展開されているんですから」（井口さん）

「湯沢と苗場って、住んでいる人間からすればちょっと離れた場所っていう感覚なんです。初開催から数年は湯沢駅のバスロータリーをシャトルバスは貸してもらえなかったんです。駅に降りるのはほとんどがフジロックのお客さんなのにそれはおかしいと思って。町長に直談判して、ロータリーでシャトルバスの乗り降りをできるようにしたんです。ボランティアを地元で募集して、手伝ってもらったら一緒に見に行こうって。それをきっかけに湯沢でのフジロックの協力体制のすそ野が広がっていきました」（高橋さん）

「フジロックのキャンプサイトの光景が、アウトドアのスタイルの移り変わりを感じさせてくれますよね。どんどん段取りが良くなっていくし、スマートになっていく。この感覚を苗場で感じられるっていうことが、私たちとしても本当にうれしいんです」（今泉さん）

「苗場では臨時の総会があって、オレンジコートの場所はサッカー場でもあるので、学生の夏合宿の受け入れ体勢で影響が出るかもしれませんと言ったんですけど、まったく反対の声が出ませんでした。それだけ苗場にとってフジロックは大きな存在なんです」（新井さん）

Photo by アリモトシンヤ（fujirockers.org）

新たなフェイズへ。ニュージェネレーションが開く音の扉。

ルーキーアゴーゴーから3年。フジロックがバンドを成長させる大きなポイントとなっているという。ルーキーを含めると3度目の出演となるフジロックで新たなフェイズへ踏み出す。

Text by Takashi Kikuchi　Photo by 横山マサト

―― 3年前にルーキーアゴーゴーに出たときの思い出を聞かせてください。

市川　D.A.N.を2014年夏にスタートさせたんですけど、そのときに、自分たちでどういうふうに活動していこうかって計画表のようなものをたてたんです。目標を決めていって。そのなかの大きな目標のひとつがフジロック出演でした。それで翌年にルーキーに応募したんです。

櫻木　ルーキーに出ることではじめてフジロックに行ったんですね。フジロックに限らずフェス体験としてもはじめてだったので、フェスティバルに漂っているムードが強く記憶に残っていますね。都内で日常的にやっているハコでのライブとは違って、得体の知れないエネルギーみたいなものは感じていました。

川上　僕たちも夏フェスには全然出たことがなかったから、ああいう雰囲気もはじめてだったし、浮ついていたのかもしれないけど、カオスをさまよって変な感覚になっていました。

市川　そもそも野外でライブをすることさえ、ほぼはじめてでしたから。いろいろ相まって、感情のコントロールがうなくできない状態でしたね。

―― 翌年には連続してフジロックへの出演を果たしています。

川上　レッドマーキー出演が決まって、そこを最終目的地としてツアーも回っていました。それまでに野外フェスにもいろいろ出ていたし、絶対にやるぞっていう気持ちで準備をして。みんなが同じ方向を向いて動いていましたね。フジロックという大きな存在に挑むというか。

櫻木　フジロックは開放的ですよね。そのことがフジロックでライブをし、いろんなライブを見たことでわかりました。お客さんが自由というか、普段の生活にとらわれずにそこにいることを楽しんでいる。その楽しみ方がピュアな感じというか。僕の友達も、レッドマーキーでのライブが未だに忘れられないと話してくれているんです。僕個人としてもあの日のライブは、一生忘れられない強い記憶となっていて、もう一回そういう体験をしたいという思いがあります。味をしめたというか。今年のフジロックは今まで積み上げてきたものと新しいフェイズに行くためのチャレンジもあって、挑戦していきたいという思いが強いですね。より高みに行けるように、前回に出たときよりもさらに自分たちでも感動したいって思っています。お客さんとともに、僕らも感動したい。

―― フジロック直前にセカンドアルバムがリリースされます。どんな作品に仕上がっていますか。

川上　自分たちが今出したい音をたっぷりやったという感じです。なんだこれ感はあるかもしれないけど、聞いていけば納得してもらえると思います。

市川　刺激的で、でも以前から僕らのなかにあるものは変わっていないし。

―― 3回目のフジロックではどんなステージにしたいと思っていますか？

川上　悔いのないようにやりたいですね。

櫻木　僕らのライブを見ることでしか浮かびあがってこない気持ちとか体験を感じてもらえるように、精一杯、一生懸命やるっていうことに尽きると思います。今までに僕らのライブに来てくれていた人にすればアレンジも変わっているだろうし、新しい曲もふんだんに取り入れてやろうと思っています。

Profile

2014年、櫻木大悟（Gt,Vo,Syn）、市川仁也（Ba）、川上輝（Dr）の3人で活動開始。2015年7月にデビューe.pをリリースし、ルーキーアゴーゴーに出演。翌年4月にファーストアルバム『D.A.N.』をリリースし、CDショップ大賞2017の入賞作品に選出された。ジェイムス・ブレイクやTHE XXなどオープニングアクトを務めるなど、ジャパニーズ・ミニマル・メロウのクラブサウンドで追求したニュージェネレーションとして注目を集めている。

http://d-a-n-music.com/

CD

『Sonetine』

フジロック直前の7月18日にリリース予定のセカンドアルバム。3人のバンドとしての表現力をストレートに拡大させたサウンドを構築し、次なる次元へと踏み込んでいる。タイトルの『Sonetine』とはもともとは小規模のソナタを指す、イタリア語語源の音楽用語。同名の北野武監督作品『ソナチネ』と同じようなものが内包しているアルバムとメンバー。

苗場にある世界への扉。

1999年苗場生まれ、フジロックと同い年。

若月隼太（アルペンスキー・レーサー）

Text by Takashi Kikuchi　Photo by sumi☆photo

苗場でフジロックが再始動した年に苗場で生まれ、苗場でスキーの道を歩み出した。フジロックが身近にあったことで、世界の扉が近くにあることを感じ取っていたのかもしれない。

苗場でフジロックが初開催されたのが1999年。その年に苗場で生まれ、世界へ羽ばたいているアルペン・スキーヤーがいる。若月隼太さんだ。実家は苗場スキー場から徒歩2分の「苗場ラ・ネージュ」というペンション。冬にはスキー場に行って遊ぶことが日課だったという。

小学校時代の同級生は若月さんを含んで6人。現在は統合され母校は閉校になっている。苗場という小さな町にとっては、フジロックは一番大きな祭りだった。

「たくさんの人が集まることが楽しくて前夜祭に同級生と行って、苗場音頭を踊って、ちょっとだけレッドマーキーに行って。それが小学生低学年の頃の最初のフジロックの思い出です。うちがオアシスにお店を出していたこともあって、ご飯を食べに行ったりもしていました」

そして年齢を重ねていくにつれ、音楽への興味が少しずつ増していった。

「小学校の高学年になって、前夜祭だけではなく、フジロックのライブも見に行くようになったんです。最初の記憶として残っているのはSuperflyくらいでしたから。中学生になって、ロック好きの友だちとサカナクションを見に行って、その帰り道でノエル・ギャラガーの『ドント・ルック・バック・イン・アンガー』の大合唱を聞いて感動したんですよ。それからオアシスを聞くようになって、フジロックに出演しているアーティストの凄さがわかるようになったんです」

中学になると、全国トップレベルのスキーヤーとして注目を集めるようになっていった。苗場出身のアルペン・スキーヤーといえば皆川賢太郎さんがいる。皆川さんは1998年の長野から2006年のトリノまで3大会連続でオリンピックに出場。トリノでは回転で4位に入賞。この競技での男子の入賞は50年ぶりの快挙だった。

若月さんにとっては、苗場にはふたつの世界の扉があったのだろう。ひとつはフジロックという音楽の扉。もうひとつは皆川さんを目標としたアルペン・スキーの扉。

「フジロックは別世界なんですね。雰囲気を感じるだけでワクワクして楽しくなってしまう空間。サマソニも行ったことあるんですけど、都会のコンクリートのなかと森のなかとでは音の響きが全然違っていて、僕はやっぱりフジロックの方が好き。山では天気も崩れたりもするけど、それも含めて楽しいんです。僕にとってフジロックは羽目を外せる場所なんですね。普段は全日本代表としてスキーのことだけを考えて、トレーニングを続けています。唯一解放されて自由に遊べる日がフジロックなんです。小学校のときは当たり前に毎年ある祭りだったけど、だんだんとこれは普通じゃないぞ、とわかってきて。自分の生まれ育った町に海外アーティストが向こうからやって来てくれる。レジェンド的な人たちもたくさん来てくれる。本当に胸を張って自慢できる祭りなんですよ」

高校時代から国体の少年の部で優勝するなど、輝かしい成績をおさめていた若月さん。冬だけではなく、夏も海外へ遠征してるけれど、毎年のようにフジロックの期間だけは苗場に戻ってきているという。自分の町の祭りに対する誇りがそうさせるのだろう。

「一度だけ帰ってこれなかったことがあったんですよね。スイス遠征があって。情報だけはインターネットから流れてくるので、どうしようもなくムズムズして。海外の選手もフジロックという名前を知っていて『フジロックは俺のホームタウンでやっていて、こんなアーティストが今年はやって来るんだ』って自慢したりしています」

世界を舞台に戦っているとはいえ、まだ大学生でもある。フジロック期間中は家の手伝いも忘れてはいない。

「夜中の3時くらいまで遊んで、2時間ほど寝て、10時くらいまで家の手伝いをする。そこから夕方まで寝て、夕方から出撃する。それがフジロックでのルーティーン。毎年のように泊まりに来てくれる方もいました。もう亡くなってしまったんですけど、ロック好きのお客さんがいて、その人がセレクトした曲をCDにしてもらったことがあったんです。ビートルズ、ローリング・ストーンズ、ジミ・ヘンドリクス、ボブ・ディラン。そんなレジェンドの人たちの曲が入っていて。友人たちからは、そんな古いロックっておもしろいのか?って言われていましたけど、今も好きで聞いています。世代を超えて共通の好きが見つけられるのも音楽の強さだし、フジロックの素晴らしいところだと思います」

そのCDに収録されていたボブ・ディランが、今年はヘッドライナーとしてやってくる。若月さんも、当然、ボブ・ディランが今年一番のお目当てだ。

「5月から6月はアメリカに行って、夏はニュージーランドかヨーロッパに行って雪上トレーニングをする予定なんです。7月後半に遠征がかぶらないことを願っています。ボブ・ディランは伝説の人だから、どうしても見たい。ケンドリック・ラマーやジャック・ジョンソンも見たいし。日本人だと30周年のエレカシとか、フジロックで見るライブのおもしろさを感じさせてくれたサカナクションとか。フジロックに行くたびにいろんなジャンルの音楽が聞けるので、好きな音楽の幅がどんどん広がっています。最初はノエル・ギャラガーから入ってロックが好きになったんですけど、フェスを通してそれぞれの魅力を感じています。最近ではレゲエやヒップホップも聞きますよ。すべてフジロックの影響と言っても過言ではないです」

若月さんにとって世界は決して遠い別世界のものではない。物心がついた頃から世界が目の前にあった。

得意な種目は技術系と言われる回転と大回転。今年の平昌では、モーグルでフリースタイルスキー男子としては初のメダルを原大智さんが獲得した。しかしもっと歴史の古いアルペンでは、1956年の猪谷千春さんしかメダルを獲得していない。

「今はFIS世界ランキングが200位くらいなんですけど、来年には100位まで上げることが当面の目標です。夏は涼しくて過ごしやすくてフジロックがあり、冬は存分にスキーができる。家が苗場で本当に良かったと思っています」

苗場から世界へ。

苗場で育った若月さんの視線の先には、4年後の北京オリンピックもある。

1999年苗場生まれ。ジュニア時代から大きな注目を集めてきた。2016年のワールドカップ苗場に前走をするなど着実に世界の舞台へ進出。日本のアルペン・スキーを担うひとりして大きな期待を集めている。2022年冬季オリンピック有力選手。実家はペンションの「苗場ラ・ネージュ」。

▲グリーンステージ後方のエリアには、広げたままのシートや誰も座っていないイスが、自分たち場所取りのために放置されている。

再び世界一クリーンなフェスを目指して

フェスティバル・エチケット FUJIROCK「OSAHO」とは!?

ルールでもない、規制でもない。快適で気持ちのよいフジロックをつくるのは、参加者ひとりひとりの気持ちが大切。国境を超え、文化を超え、フジロックから始まるあたりまえのフェス・エチケットを「OSAHO（お作法）」と呼ぶことにした。

Text by Hikaru Kamo

マナー向上

ビジュアルと音楽の力でフジロックの「お作法」を伝える

自然との共存を目指し、会場周辺の森の保全活動やごみの分別を促す「ごみゼロナビゲーション」活動などを行ってきたフジロック。来場者一人ひとりの意識によってゴミの落ちていないフジロックは作られ、国内はもとより海外からも「世界一クリーンなフェス」との称賛を受けてきた。

しかし、ここ数年、来場者が増えたことや、悪天候の影響などで、フジロックの環境が芳しくなくなっているのも事実だ。来場者の数だけゴミが増え、マナーが低下するのではなく、来場者が今いちどマナーを見直し、再び「世界一クリーンなフェス」を目指すためにマナー向上キャンペーンが始動した。

フジロックは夢のような場所であることは間違いない。しかしお膳立てされたオ・モ・テ・ナ・シが用意されているわけでもない。自分のことは自分で責任を持ち、自然をリスペクトし、そのうえで音楽を自由に楽しむ。それがフジロックのスピリットだ。マナー低下は困るけど、ルールで参加者を縛るというのもフェスではない。近年、海外からの来場者も増え、文化や使う言語も異なる彼ら、彼女らにもこのスピリットを分りやすく伝えるにはどうしたらよいのか、そんな彼らと仲良く過ごすためにも「お作法（OSAHO）」キャンペーンが立ち上がった。

そこで白羽の矢を立てたのが、連続テレビ小説『半分、青い。』のオープニングムービーなどを手がける新鋭の映像作家、くろやなぎてっぺいさんだ。映像と音楽、アートをミックスさせる独自のスタイルが注目を集める彼に、今回のキャンペーンをより多くの方に伝えるために、音と映像のメッセージ制作を依頼した。

「外国人の方も含めたすべての人にフジロックのマナーを伝える映像を、というお話しだったので、リズミカルでアップテンポな歌と音楽に合わせて文字やイラスト、ピクトグラムを動かす作品にすることにしました。ピクトグラムを動かすことをモーショングラフィックスと呼ぶのですが、いわゆる一般的なアニメーションよりもダイレクトにメッセージを伝えることができます。初めはなかなかイメージが決まらなかったのですが、スマッシュとの打ち合わせのなかで、日本ならではの所作振る舞いを表す「お作法（OSAHO）」というキーワードが出て、そこから一気に全体のトーンや流れが具体化していきました。歌は「ごみゼロ」のボランティアスタッフや来場者のみなさんで歌ってもらえると嬉しいです」とくろやなぎてっぺいさん。

フジロックで守ってほしい4つの「OSAHO」を「BUN-BETSU（分別）」、「BUN-EN（分煙）」、「HOCHI（シートやチェアを放置した場所取り）」、「KAPPA（雨天時のカッパ着用）」が、メロディに合わせた映像とともにリズミカルに「ブンブン、ブ～ンベツ」と歌われ、思わず口ずさみたくなる。

この「OSAHOムービー」は、YouTubeなどで全世界に発信され、フジロックの来場者だけではなく、多くの共感を呼ぶことだろう。

海外からのお客さんが、歌を口ずさみながら、きちんと資源を分別しているのを見かけたら「It's Nice OSAHO!」と声をかけてみよう。そこからコミュニケーションが生まれ、日本のお作法の心が広がっていくことを願う。「OSAHO」が「MOTTAINAI」に続くグローバルな合言葉になる日も近い!?

企画段階での絵コンテ。今から完成版が楽しみだ。

映像作家のくろやなぎてっぺいさん（右）と（株）ディレクションズのプロデューサー志賀研介さん（左）。くろやなぎさんは1979年生まれ。映像作品を中心に、インスタレーション、ライブパフォーマンスなど幅広いメディアで作品を発表している。

傘の持ち込みやイスをたたまずに移動

飲食のカップや食器、ボトルのポイ捨て

張ったまま残置されるテントやマット

場所取りのため、放置されるイスやシート

最近とっても残念なあれやこれや

昨年は天気が悪かったためなのか、会場内には濡れそぼったごみが数多くあった。また最近では、壊れたテントやマットなどを残置していくケースも目につく。